



*Ever moment  
with you*

R-18

私たちは  
アルトが飛ばされてしまった  
あの日から…  
ほぼ毎日のように  
お互いを求めるようになった…

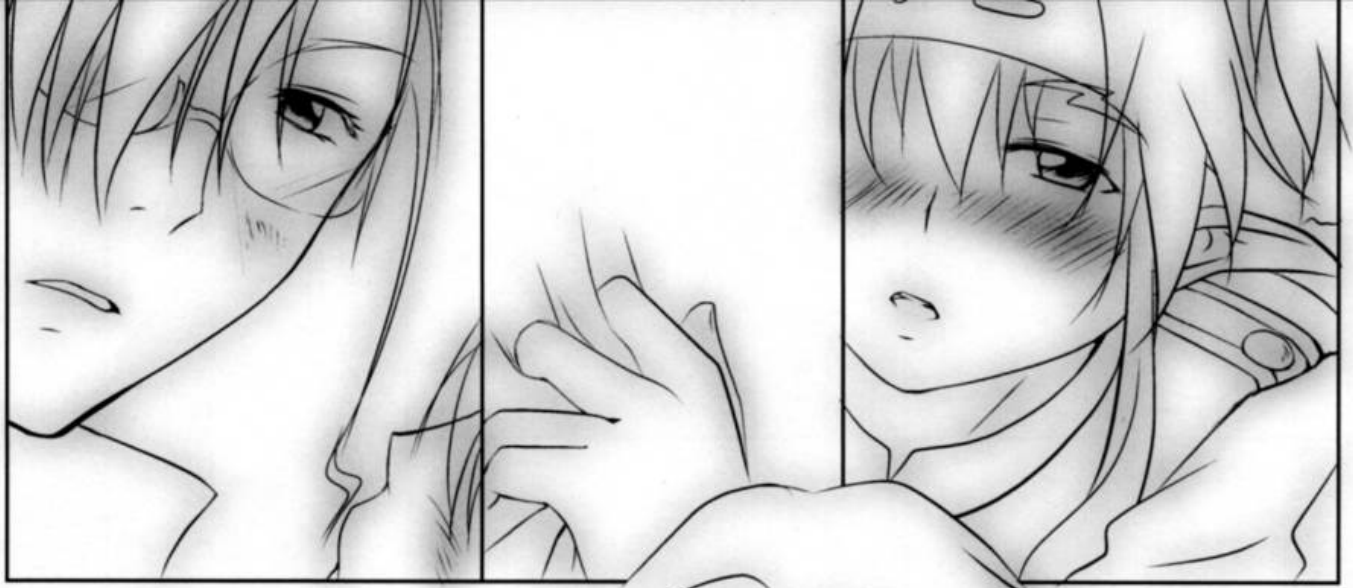


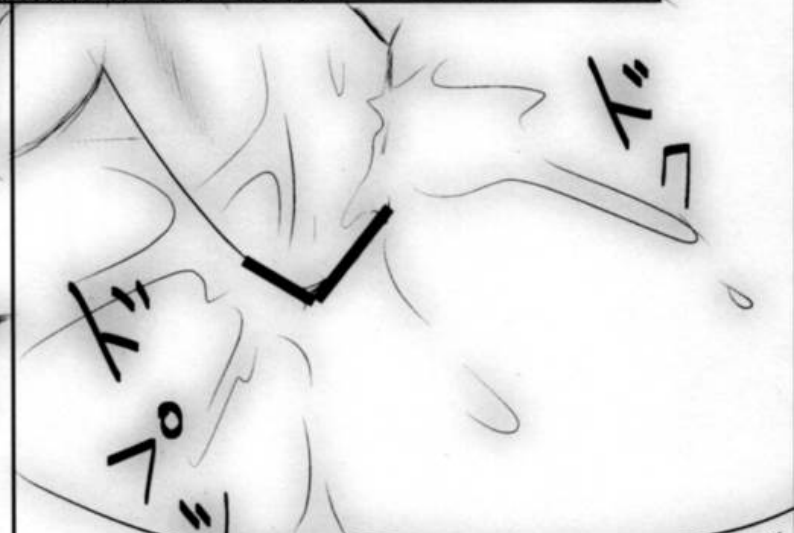
特にコレと言って  
言葉にしているのではなく  
自然と お互いに  
求めるようになっていった…



不安で…  
不安で……









学園は  
アルトが居なくなった  
今も  
何も変わらないまま…



いつか



ああ  
また  
明日…



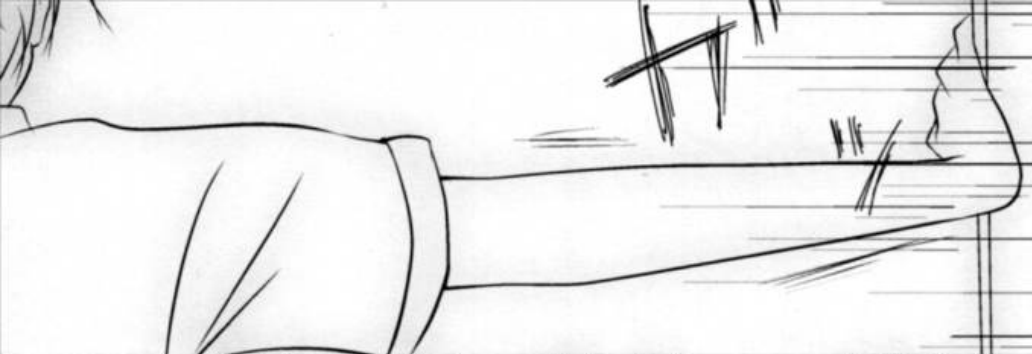
じゃあね

私たち以外は…



いつか  
帰って来ると  
信じている…  
けど…

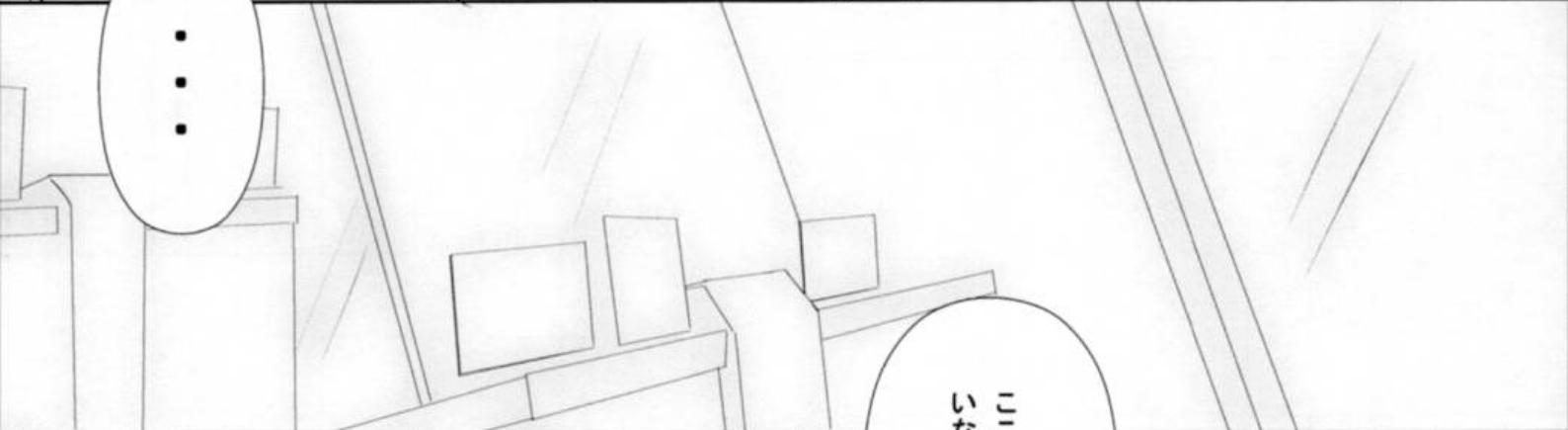




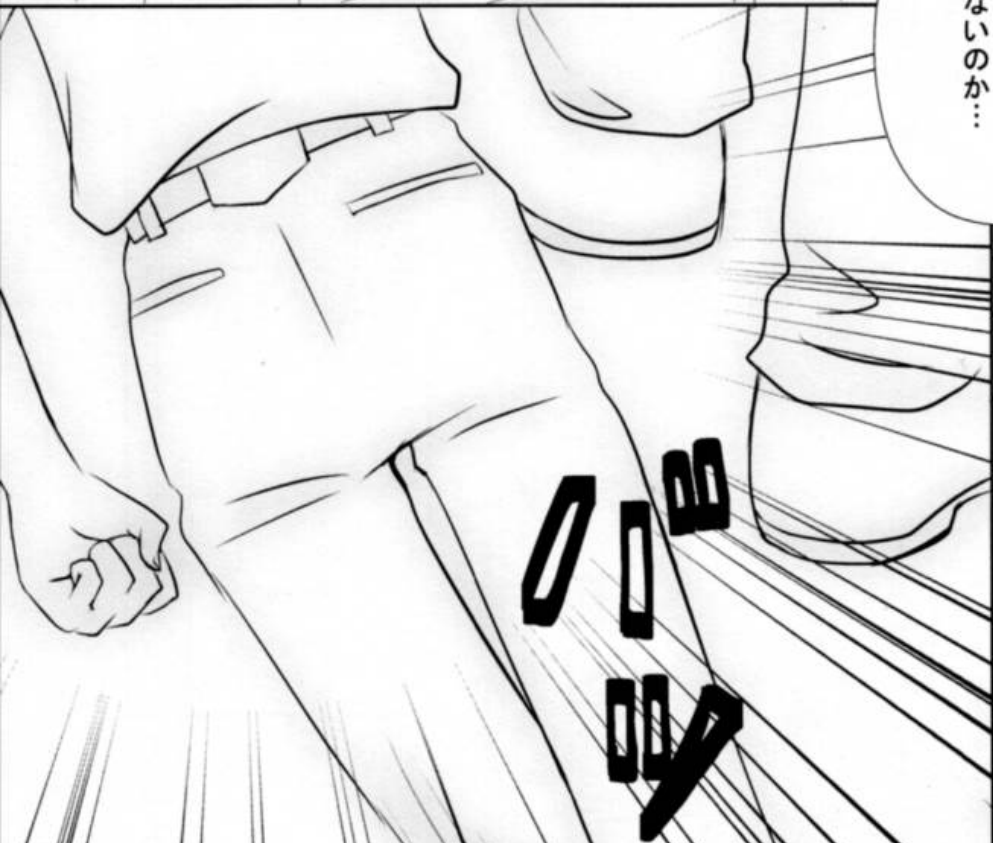
ああ！  
くっそう！  
どこに居るんだ！

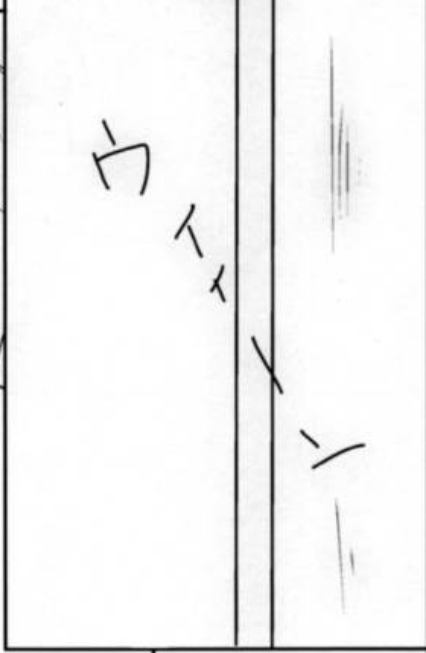
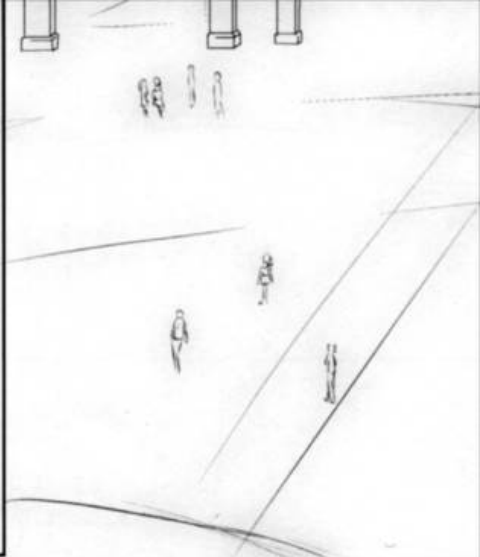


...



ここにも  
いないのか…





ミシエル…?



い  
ま







少し待っててくれ  
今すぐ用意するっ

コン

クラン!

ソレ

怖かった…

クランが  
どこかに  
行ってしまったのかと…  
思った…

大丈夫だ！

大丈夫っ

ミシェル…

ミシェル？  
本当に  
大丈夫だ！

私は  
どこにも  
いかない！



ミシェル！  
どこにもいないから

ミシェルをおいて  
どこかいったりしない！





もし…

『もし』  
なんてない



でも！



正義は  
死なないんだぞ！



だから！  
ミシエル！



大丈夫だ！  
ランカも  
そう言ってたぞ☆



おしおし



サンキューな

分かった！



うん…

でも  
クランは  
オレが守るから！

クラン！



じゃあ…

ミシエルは  
私が守る！

クラン

約束！

ああ！  
約束

ん？

…

ミシエル  
暖かいなあ…  
鼓動が落ち着く…

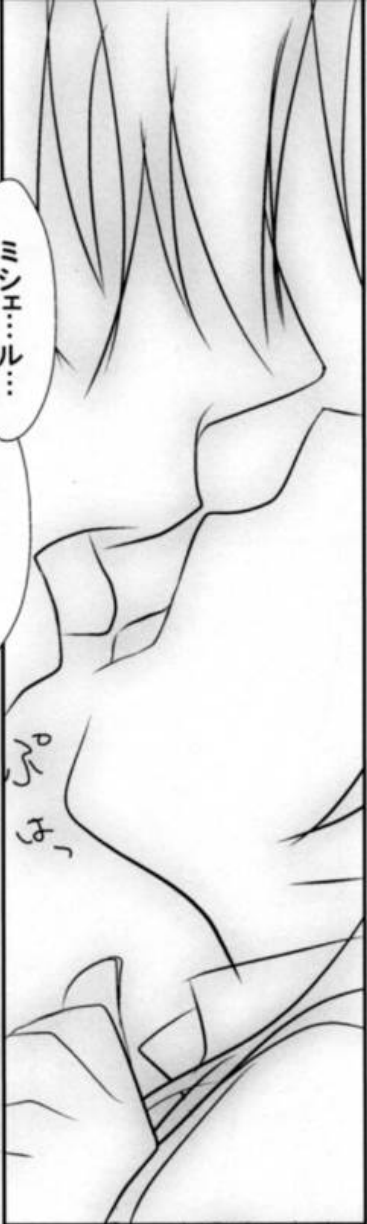




みんな帰ったよ  
誰も来やしないさ

ミシエール…

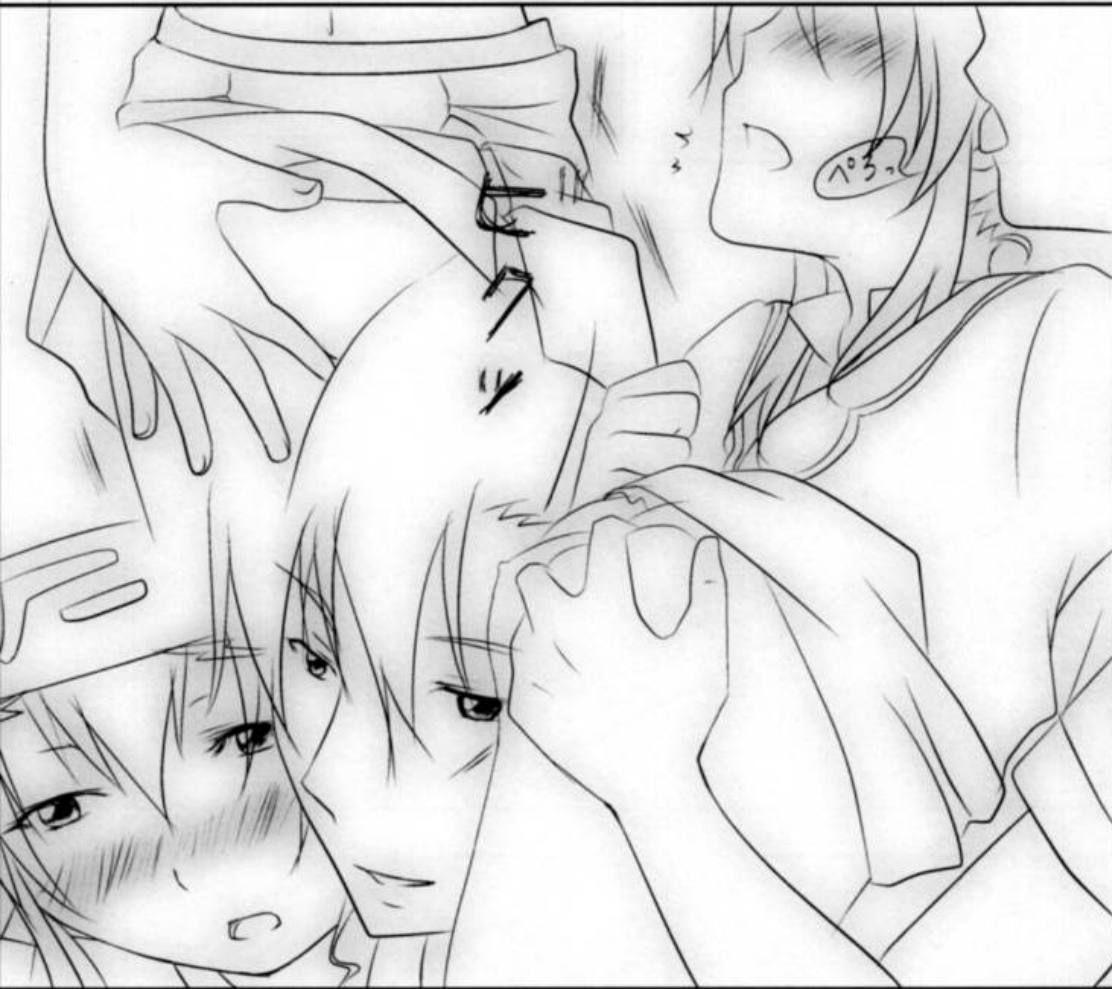
誰か…  
来てしまう…



んんっ

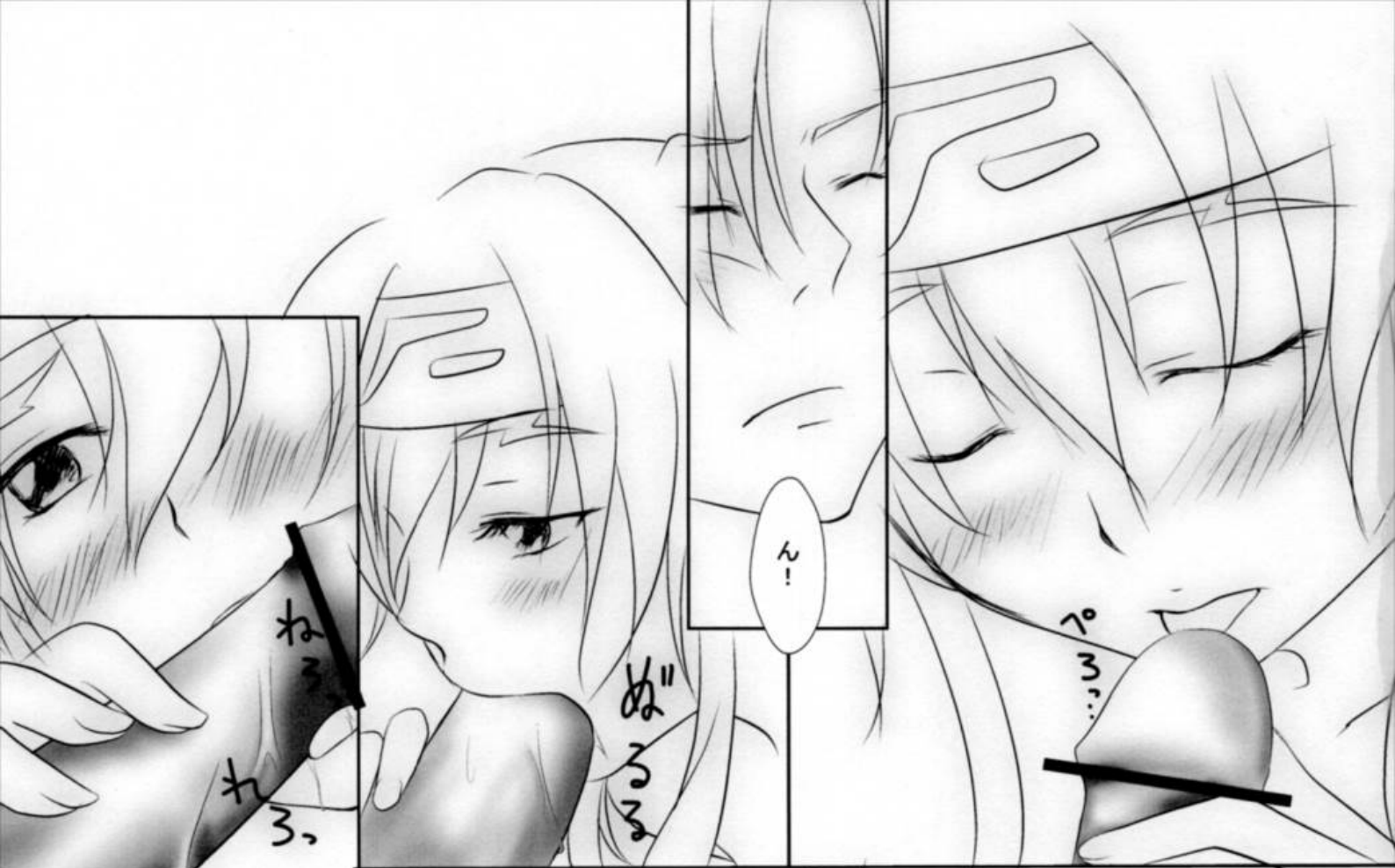


んあっ











クランは…

ほろっ

この後  
どうしてほしい？

ん…

言わないと…



入れて…

ん？  
何？  
聞こえない

奥まで  
入れて下さい…

くちゅ

くちゅ

くちゅ

はっ…

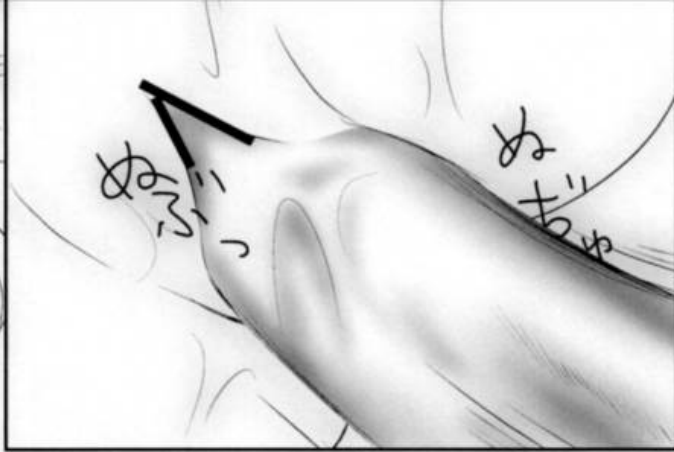


良く  
言えたね…

じゃあ  
ごほうび

さっきの  
お礼も…

ああ！！



見られ…  
てる…？

ほら  
下をみてみな…

…





みんなに…

—見られてる！



は…恥ずかしい  
みんなに  
見られながら何て…

はっ

んあっ

ああ

ズッ  
ズッ  
ズッ





ふあ

んあッ

ズッ

ズッ

んあッ...

ああ

ふあ!

んあッ

ああ!

ひゃあ♡

あああ

ズッ

ズッ



んあぁっ

あぁ!  
あぁっあぁ!

やっ

クラッ!



あぁぁぁっ

ん  
っ  
ん  
っ

ん  
っ  
ん  
っ

はッ  
あぁあぁあ





んっ

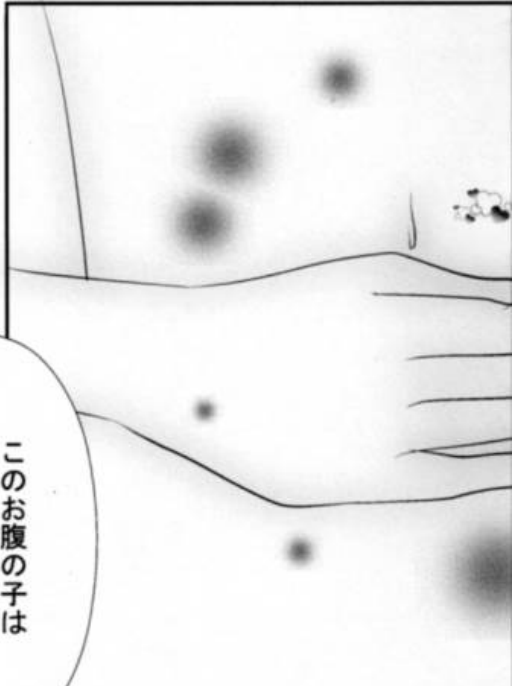
クランのこと  
絶対守ってみせる

ああ  
私も約束だ



出来たら  
だけどなっ

出来て  
ほしい  
かな…



このお腹の子は  
二人で…  
かな…

この度はお手に取って頂きありがとうございます。

楽しんで頂ければ幸いです。

まだまだ、ミハクラたくさん描きたい物があるので、

今までの総集編と一緒に出せたらなあ～

何て思ってます♪

こなこ

**\*禁止事項\***

ご協力宜しくお願い致します。

本書は18歳未満のご購入、ご閲覧

無断転写 及び 複製、

ネットへのアップロードを禁止致します。

---

20130810

honeybee

-konako mitsuki-

Decameron

-fuugi moriyama-

kona\_honey0611@yahoo.co.jp

thhp://kona.mitarashidango.com/

HP新しくなりました☆

---

\*HANAMI\*





『きみは誰とキスをする?』

杜山ふうぎ

窓外では日が暮れていく様子が演出されている。この視聴覚室にもオレ  
ンジの光が差し込み、窓際にいるクランの横顔を染めていた。

ルカの話では、この時間帯にミシエルはここへ訪れるはずだった。大事  
な話がある。今日こそはミシエルを捕まえてケリを付けてやる、そうクラ  
ンは意気込んでいた。

廊下の方から男の声があった。ミシエルに違いない。

扉が開き、予想した通りミシエルの姿がそこにあつた。こちらに横顔を  
見せ、廊下にいる何者かに話しかけているようだった。クランの存在には  
まだ気づいていない。ミシエルが室内へ踏み入ると、同伴する何者かの  
肩口がクランのいる位置からも確認できた。

咄嗟に身を隠してしまい、クランはそんな自分が可笑しくなった。てっ  
きりミシエルは一人で来ると思っていたのだ。柵に背中を預けたまま息を  
吐き、クランはミシエルに声を掛けようとした。

「ホントに誰も来ないの?」

女の声——。出鼻をくじかれ、クランは元の位置へ引き返した。陽気な  
ミシエルの声が続く。

「ああ、こんな時間帯にここを使うやつはいないさ。それに、こうやって  
中から施錠しちゃうは大丈夫」

ミシエルが何か言い、落ち着いた女の笑い声がそれに応える。とりとめ  
もない日常の会話の中にも、いちいちラブラブな雰囲気醸し出すので、  
クランは出るにすら出られなくなった。

ときおりミシエルの歯の浮くような口説き文句が織り交ぜられ、クラ  
ンは虫ずが走るのを自覚した。

自分にはあんなこと一回も言ったことがない。ミシエルさえ良いのなら、  
わたしはいつでもミシエルの想いに応えてやれるのに……。

気づくといつの間にか会話途切れていた。クランは初め、ミシエルた  
ちは部屋の外へ出て行ったのかと思った。しかしそうではなかった。耳を  
澄ますと、衣類が擦れる音だけが聞こえてくる。

不審を感じて、クランは柵から顔だけを出し、二人がいるとおぼしき方  
向へ素早く目を走らせた。

ほんの数メートル先で口づけを交わす男女の姿が目に入った。女が長机  
に押し倒され、その上にミシエルが覆い被さっている。女は唇を奪われな  
がらミシエルの為すがままにされている。プロンドが机の下へ垂れ下がり、  
かすかに揺れている。

柵の後ろに戻りクランは制服のスカートの裾を握りしめた。しばらくそ  
のまま呼吸を整える。脚の震えが止まらなくなり、太腿に爪を立てた。

なんだアレは、何が起こっている……?」

ミシエルが他の女と情事を重ねているのは知っていた。しかしいざそれ  
を目の前になると、動揺を隠すことができなかった。信じたくない、見た  
くないと思う一方で、ミシエルが他の女に対してどんなアプローチをする  
のか、そしてそれを受け入れた相手の女はどんな反応をするのか、無性に  
気にかかった。クランは欲望のままに動く二人の全てを見逃したくないと  
思った。

せめぎ合う二つの想いはクランの周囲を霧となつて漂い、混じり合いな  
がら、クランの皮膚に付着していった。水の底へ澱が溜まるように、呼吸  
をするたびクランの中で何かが沈殿していった。そしてそれに呼応するよ

うにクランは落ち着きを取り戻していく。

いつの間にか脚の震えは止まっている。クランはある種醒めきった感性で事の成り行きを見守ろうと思った。

こうして二人の行為を見守る自分を滑稽だとは思いつつ、目の前の情事へと没頭していった。

長机の上では半裸になった女の胸をミシエルの掌がまさぐっている。花の刺繍が施された下着から、肉付きの良い乳房が盛り上がっている。愛撫を受け入れるように女の両腕は背中に回されている。ミシエルは女の首筋に唇を当てながら股の間に手を差し入れた。太腿に手が触れた瞬間、女が脚を閉じた。唇は首筋に触れながら降下し、乳房まで到達した。すでにホックは外され、半ば浮き上がった下着をずらすとミシエルはそそり立った突起を口に含んだ。女の口から溜息が漏れる。開かれた脚の間で、ミシエルの右手がうごめいている。

クランは目眩を感じた。まるで自分がミシエルから愛撫を受けているようだった。高ぶりを抑えるように唇を噛んだ。

わたしは……わたしは……

ミシエルのたくましい腕に抱きしめられ、キスをされるわたし。そうだ、あそこにいるのはわたしだ。セントラ化しなくなつて、わたしの胸は誇らしげに盛り上がっている。ミシエルの愛撫にだつて十分応えられるはずだ。ミシエルのキスの一つひとつが、手の動き、呼吸一つ取つてみただつて、わたし自身を響き渡らせる。

ミシエルの男を感じ、わたしの女の部分が輝きを増す。長い間さまよい続けた想いが二人の間で融けていく。

わたしは一人じゃない、そう思わせてくれる力強い営み。二人の鼓動が重なっていく瞬間、わたしはそこに「永遠」を見る。

見下ろす真剣な眼差し。荒い呼吸の中にも、わたしへの優しさを感じる。

広い背中に回した掌の感触。筋肉の躍動。

なんてたくましいんだろう。眼鏡のくせに……

頬を伝う涙の感触でクランは我に返った。

ミシエル……

余韻になんて浸れる余裕はなかった。事後処理をする二人の姿を見ていくうちに、融け合つたはずのミシエルとの想いが、形を変え、クランを蝕み始めた。

なんだこの気持ちは……

いとおしいはずのあいつの背中が、今ではとても憎らしい。

「七つの大罪……か」

さつきまで二人が情事を重ねていた机に右手を這わせ、クランは声に出して呟いた。

× × ×

「あのさ……俺たち、その……付き合うことに？ なつたから、さ……」

同意を求めるようにちらちらクランの顔を見ながら、アルトはミシエルに向かつてそう宣言した。

「二応……お前に報告しようと思つて……」

バツが悪そうに人差し指で頬を掻き、もう一度クランの顔を見る。視界の端にミシエルの視線を感じた。クランは挑みかけるようにその顔を正面から捉えた。

「本当なのか？ クラン」

醒めきつた冷たい眼差しでミシエルは言った。克蘭が頷くと、両手をズボンに突っ込んだ。

「シエリルやランカちゃんとはどうなったんだ？」

溜息を吐き、微笑を浮かべてアルトを見る。

「どうって何がだよ」

「それは彼女たちの気持ちを考慮しての判断なのか？」

「お……お前には関係ないだろ」

本当に元役者なのか疑いたくなるほどアルトは動揺している。見かねて克蘭が腕を絡めると、腹が決まったのか、顔つきが変わった。

「あいつらとは友達以上でも以下でもない。俺が誰と付き合おうが文句を言われる筋合いはない」

頭を撫でられ克蘭は首をすくめる。素早くミシエルの顔を盗み見る。嫉妬しているかと思えば、意外と平気な顔でなんかムカつく。

「姫らしくないじゃないか。どういった心境の変化だろうねえ」

「誰が姫だよ」

「……ま、お前が何かに打ち込むなんてそうそうある事じゃないからな。付き合ってみればいいさ」

「冷静な振りして分析してんじゃねーよ」

「俺は冷静だよ、アルト。実際、仲のいい姉貴に彼氏ができた程度の問題だしさ。ただ、その相手が自分の良く知る同級生だったってだけでね」

自嘲気味に目を閉じて、ミシエルはおどけたように両手を広げた。片目を開けて克蘭を見る。

「克蘭、良かったじゃないか。彼氏ができて。ここから祝福するよ」

「それはお前の正直な気持ちなのか？」

「ああ、お前とは幼なじみだからさ。アルトはいいやつだよ。陰ながら庇

援させてもらう」

「どうしてこうなった？ わたしは何を間違えたのだ……？」

「そうだ、二人は週末何か予定があるか？」

克蘭とアルトは顔を見合わせ、無言でミシエルに視線を向ける。

「ないんだつたらちよつと俺に付き合えよ」

「どういうことだよ、ミシエル」

「せつかく付き合い始めたんだから、デートぐらいしないな。不慣れなやつ同士じゃろくなデートもできないだろうから、俺がコーディネートしてやるよ」

「それは大きなお世話というものだぞ、ミシエル」

「まあまあ、なんだかんだ言つて、俺も一度やつてみたかったんだ。Wデートつてやつをさ」

「ば……お前なに言つてんだ」

直球で照れるアルトをよそに、じつとミシエルを見つめる克蘭。その目は据わっている。

「別にいいだろ？ 付き合ってるんだしさ。海のデートだから、ちゃんと水着持つて来いよな」

克蘭とは目を合わせず、一方的にそう言い置いて、ミシエルは二人に背中を向けた。

一週間前、克蘭はサンフランシスコ・エリアにあるオズマの家を訪ねていた。

「オズマ、貴様に力になって貰いたいことがある」

見た目に似合わずかいがいしく茶を淹れ、オズマは克蘭の目の前に置いた。エプロン姿が板に付いている。普段から家事をこなしていないとこ



うはいかない。

「お前が訪ねてくるなんてどうせ野暮用だとは思っていたが、その格好はなんだ？」

うさん臭そうに克蘭の全身を眺めながらオズマは向かいのソファアへ腰掛けた。

「うるさい。見て解らないか……」

水着のような真っ赤なハイレグの衣装にブーツ。額にはブルーのヘッドバンドが巻かれている。

「やけに派手な水着だな。スイミングクラブならここから二キロは離れているぞ」

「どこから見てもミレーヌ・ジーナスだろう！」

憤慨する克蘭を後目にオズマは湯呑みを口へ運ぶ。

「まあいい、とにかくお前に聞いて貰いたいことがある」

「なんだ、今頃ファイアーボンバーの魅力に気づいたか？」

「この格好と相談とは別問題だ」

「PVなら貸さないぞ」

「だから違うと言っておろう。……その、なんだ、ファイアーボンバー好きのお前からしたら、ミレーヌの衣装というのはたまらんのだろう？」

「ファイアーボンバーは確かに好きだが、俺はロリコンじゃねえぞ」

「ばか者、わたしはこう見えても女子高生だぞ、俗に言えばJKというやつだ。世のオヤジどもが憧れる職業ナンバーワンだぞ！」

「あのな克蘭、女子高生は職業じゃないぞ。それに女子高生だって、俺からしたら十分に子供だ」

「ふんつ、人を子供扱いしおって。そんなだからランカにだって愛想尽かされるのだ」

こんなやりとりの末、克蘭はオズマに恋人役を頼んだのだった。ミレーヌの格好をしたのは、少しでもオズマの気を惹くためだ。しかしオズマは自分の身代わりに、アルトを代役として立てた。

最初アルトは頑なに断ったが、オズマのゴリ押しの前に膝を折ることになった。いやいやながら、克蘭の恋人役を引き受けてくれた。

しかし、この展開は……。

週末のデートに向けて、克蘭はアルトたちとフォルモへ買い物に来ていた。ミシエルの気を惹くための、とっておきの水着を選んだためだ。ちょうど非番だったのか、それとも任務自体が暇なのか、ルカとポビーも同伴していた。

克蘭の目の前に、三者三様の水着が突き出されている。

女の気持ちが解るのか、アルトはタンキニにバレオが付いた花柄のデザイン水着。バストには厚手のパッドがしっかりと収まっている。ポビーは直球で、モノトーン柄の、シックだけれどエロ可愛いピキニ。紐の部分だけ赤く色が付いている。せっかくのアピールできる場だから、女を売らないと損よ、とポビーは付け加えた。こちらもしっかりパッドで武装されていて、試着した克蘭の胸元にはなんと谷間すら存在した。

そして、問題はルカ・アンジェローニだった。その手に持っているのは紺色のワンピース水着。ありていに言えば「スクミズ」というやつだった。自重しろと喉元まで出かかったが、付き合っただけで貰っている手前、克蘭はその言葉を飲み込んだ。

アルトが選んだ水着も可愛いと思ったが、克蘭は結局ポビーのピキニを購入した。

克蘭とアルトがターミナルで待っていると、待ち合わせ時間五分前に

ミシエルが姿を現した。隣にはサングラスをかけた女が付き添っている。視聴覚室で見た女とは違った。

「待たせたな」

涼しげに目を細め、ミシエルは同伴する女を紹介した。

「こちらはグレイス女史。きょうは無理言って付き合っただけだ」

言葉とは裏腹に、紹介されたグレイスはミシエルの右腕に自分の腕を絡ませ、よろしく、と微笑した。とても親しそうに見える。

「みなさん若い方ばかりですから、水着になるのは少しためらいがありますが、きょうは若い方のエネルギーを少しでも多く吸って若返りたいと思います」

「知つてると思うけど彼女はシエリルのマネージャーなんだ。きょう一日よろしく頼む」

リゾート艦であるアイランド8はそこそこの賑わいを見せていた。日が暮れば花火大会も開催されるので、ビーチの一部には露店が並び、まるで夏祭りのような独特の雰囲気を出している。

水着に着替え、克蘭がビーチの砂を踏むと、すでにミシエルとグレイスは木陰で休んでいた。距離が近い。それに……

克蘭が近づくと、二人は立ち上がって彼女を迎えた。克蘭の頭の中では、ある言葉が耳鳴りのように響き渡っていた。紹介されたとき、グレイスは確かにこう言った。

『水着になるのは少しためらいがありますけど……』

そう言った張本人は恐ろしく布地面積の少ない水着を着こなし、胸を支えるように腕を組んでいる。こぼれ出した乳房はゼントラ化した克蘭にも引けを取らなかった。

年増め、やる気か……

パレオを剥ぎ取り、克蘭は笑顔を見せた。

「待たせてすまない。アルトはまだか？」

耳の上の髪をかき上げ、上目遣いでミシエルを見上げる。さりげなく胸を強調するのも忘れない。ささやかな谷間がこれほど心強いと思ったことはなかった。

「アルトなら今アイスクリームを買いに行ってる。克蘭大尉はストロベリーで良かったろ？」

「よく解ってるじゃないか、ミハエル少尉。褒美にお前におごらせてやる」「こういうときはな、彼氏のアルトにおごらせてやるのが淑女のたしなみだ」

「そんなことはお前に言われるまでもなく解っておる」

アイスクリームを食べ終わると四人でビーチを流した。最近の克蘭の日常はSMSの任務と学校との往復だったので、塩水の打ち寄せる砂浜は克蘭を和ませた。危うく本来の目的を忘れそうになる。

波打ち際で戯れるカップル。子供たちの嬌声。

砂浜の一部ではビーチバレーの大会が開かれている。克蘭は解説席に見覚えのある髪型を見つけた。

大統領首席補佐官——レオン三島。

「さあさあ盛り上がってきましたね、勝負はこれからですよ、おやおや、そんな角度でトスを上げては……ほうら言わんこっちゃない！ トスは角度と高さ、そしてタイミング！ ポールは友達ですよ。さあ、次は向こうのターンだ！」

どうしてやつがこんなところでビーチバレーの解説を……

克蘭以外三島の存在に気づいていない。前を歩くミシエルは親しげにグレイスに語りかけている。ときどき腕や肩に触れているのが気にくわ

い。

アルトが顔を寄せてくる。

「なあ克蘭、このままだと俺たち本当に恋人にされちゃうぞ」

「解っておる。今作戦を検討中だ！」

海の家に入る。席を確保すると、ミシエルが四人分の焼きそばとドリンクを注文した。アルバイトの女の子が厨房にオーダーを伝える。厨房では頭にタオルを巻いてサングラスをかけた男が威勢良く「ヤア」と応える。

「フフ……」

うつむき加減にホルターネックの紐を整えながらグレイスが微笑した。となりでミシエルがどうしましたと訊く。

「いえ……こういうの、とつても久しぶりだから……」

「解ります。シエリルのマナージャーも大変なんじゃないですか？ きょうは来ていただけで光栄です」

「お邪魔じゃないかなって、ずっと心配だったんですけど、本当に来て良かったと思っています。たまの休養だって、シエリルも笑顔で送り出してくれましたし」

克蘭の視線に気づくとグレイスは優しげな笑みを浮かべた。

「……克蘭・克蘭さん、それに早乙女君も、私に遠慮せずに好きなだけ羽を伸ばしてくださいね」

「克蘭でいい」

ミシエルの方を盗み見ながら克蘭は言った。

「普段はもつと、アルトも積極的なんだがな。きょうはこの通り、借りてきた猫のようにおとなしい。ほらアルト、いつものようにしてみてください。わたしはぜんぜん構わないゾ」

アルトは目を剥きながら、克蘭に無言の圧力をかける。

「そんな目をするな。我慢するのは体に良くないぞ。グレイスもああ言ってくれてるんだ、男らしいところを見せてやれ」

「恥ずかしがるなよ、アルト少尉」

頬杖を付いてミシエルが言う。一瞬、ミシエルを睨み、アルトは観念したように目を閉じた。かすかに鼻から息が漏れる。

「人前では言わない約束だったろ」

先程までとは一転、流し目で克蘭を見る。

「お前こそ、もつと甘えていいんだぞ。だけど、好きって百回言つて……」

とか、酸欠になるくらいギョツとしてっv ……とかきょうは言うなよな」  
「仲がいいのね。若いつてうらやましいわ」

頬に右手を触れながらグレイスが言う。キメ顔でミシエルが語りかける。

「あなただって十分にお若いですよ、グレイスさん。そんなに謙遜なさるのは僕は美德だとは思いませんね。美しさは罪です。その罪をちゃんと背負わなければいけません」

二人の様子を憎々しげに見つめながら、克蘭は席を立った。厨房の方へ向かう。

「焼きそばをあと五人前追加だつ！」

カウンターに肘をついて挑みかけるように声をあげる。

「そんなに食べられるのか？ クラン」

「ミシエル、貴様には関係なからう！ ……さっきのはナシだ、焼きそば十人前にしてくれっ！」

無茶ぶりされた店員は焼きそばを袋から出していき、途中で十袋ないことに気がつきテンパリ気味になった。

「……業務連絡、業務連絡！ アンタレスーからGへ、アンタレスーからGへ、焼きそばの麺を可及的速やかに補給されたし、繰り返す、アンタレ



ス1からGへ、焼きそばの麺を……」

口許に手をやっているが、その手には何も握られていない。その様子を克蘭が醒めきつた眼差しで見つめている。

「おい克蘭、店員が困ってるじゃないか」

見かねてミシエルが間に入る。

「どうせ食べきれないだろ。無茶するとお腹が出るぞ」

「放っておけ！ お前には関係なからう！」

鉄板の上の焼きそばからは煙が昇っている。サングラスの店員は壁を見つめながらぶつぶつ言っている。

「なあミシエル……。子供の頃はよく一緒に遊んだよなあ」

背中を向けたまま克蘭は語りかける。

「お前は泣き虫で、わたしやジェシカがいないと何もできないようなやつだったな」

「それは昔の話だろ。それよりその焼きそばヤバいんじゃないのか？」

「わたしはお前を本当の弟のように可愛がったんだぞ。……成長するとお前は昔のように甘えなくなった。言うことだつていっち理屈っぽくなつて、泣き虫だった弟は、いつの間にかわたしのことを追い抜いていった。そう思っていた……」

克蘭は振り返ると、ミシエルの顔を真つ直ぐに見た。

「たんなる幼なじみとか、腐れ縁とか、そんな風に思ってるかもしれないが、わたしの気持ちは今も変わらない。こんなとこだけ、こんなとこだからこそ、言わせて貰う。ミシエル、自分の気持ちに正直になれ」

「いきなり何言ってるんだ、恥ずかしいやつだな」

中指で眼鏡を持ち上げミシエルは言う。

「そんなこと言っていると、アルトが嫉妬するぞ」

「嫉妬させておけばいい。わたしはな、ミシエル。存外ワガママなのだぞ」  
「自分で言うなよ」

人数分の焼きそばが届いた。サングラスの男は相変わらず活動停止状態だったが、どうやら裏にもう一つ鉄板があるらしく、バイトの女の子が次々と焼きそばの載った皿を運んでくる。割り箸を割り、克蘭はすごい勢いで焼きそばを掻き込み始めた。

「無茶するなよ、腹を壊すぞ」

となりでアルトが心配している。グレイスはいつの間にか姿を消していた。

咳き込み、克蘭は焼きそばをジュースで流し込んだ。

「暴飲暴食……か」

克蘭の目の前に並べられた焼きそばを見つめてミシエルは溜息を吐いた。

「七つの大罪だな」

そう呟くと、ミシエルは並べられた皿の一つを引き寄せた。

20130810 MACROSS F  
honeybee -konako mitsuki-  
Decameron -fuuji moriyama-

